Title	慶應義塾大学三田情報センター蔵『平忠度集』：翻刻と解題
Sub Title	Reproduction and interpretation of Taira-no-Tadanori-shu, property of Keio university library and information center, Mita
Author	川村, 晃生(Kawamura, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.48- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶応義塾大学『平忠度集』——翻刻と解題
三田情報センター蔵

川村 晃 生

解 題

『平忠度集』（忠度百首）は伝本が多く、古く『群書類従』（巻二五七）以下に数種の翻刻も存するが、その研究史の概略については、有吉保氏「忠盛集・忠度集について―伝本と本文の問題点―」（『語文』第59輯）に簡要な記述があり、併せて本文上の問題点が提示されている。いまそれをなぞるつもりはないが、吉田幸一氏、神作光一氏「鎌倉時代古写『忠度集』の解説」（『王朝文学』6号）所掲の木村弥三郎氏蔵本の紹介を兼ねた研究を嚆矢として、森本元子氏「『忠度集』に関する覚書」（『私家集の研究』昭41、明治書院）に、書陵部蔵「忠度朝臣集」（五〇一・二六五）の復元と木村本との近似関係の指摘があり、さらに有吉氏（右掲論文）に御所蔵本四種の紹介を含めた本文研究がある。しかしながらこうした研究史の連なりを一瞥しても、忠度集諸本の本文関係は、同一系統とはいえきわめて複雑であり、さらに詳細な諸本の研究と整理が必要であると思われる。

ここに紹介する『平忠度集』（仮称）は、慶応義塾大学三田情報センター蔵『和歌題林抄』（110X/551/1）の巻末に付載されるもので、後述する如く巻頭七首のほか四首を脱し、内題も存しないが、おおむね百首の形態を保持してい

る。体裁は、縦22、6×横15、5センチ、表紙白、列帖装、本文料紙斐紙、表紙中央に「和歌題林 全」と打付書、一面八行、和歌一行書、詞書一〜二字下げ、一〜一三四丁を「和歌題林」が占め、一三五丁才より一四七丁までに「忠度集」が付載されている。いずれも同墨同筆と思しく、一三三ウ〜一三四オに「此一札坂口諸左衛門方以重依所望難去不願悪／筆令書写早／大永貳壬午六月五日右筆吉祥坊信舜」とある。この大永二年（一五二二）の識語は本書自体の書写年代とも見なし得るが、なおその断定はしばらく俟ちたい。またさらに一四八オに、別墨別筆にて「濃州安八郡平野庄／日吉山一乗寺蓮花院常住」と記されている。後年の所蔵者を示すものと思しい。

さて本書の本文を検すると、たとえば『新編国歌大観』本に比して、かなりの異同が存する。その主なもののいくつかを左に列記してみたい（異同本文の上段が該本、下段が大観本。番号は大観本による）。

(1) 本文の有無

欠脱歌一、二、三、四、五、六、七、三四、四三、五三、六〇。

一〜七の七首の欠脱は、八行書本文の様態から察するに、内題を含めた約一丁分の分量が想像されるので、巻頭一葉の剥落であろうか。また六〇は、詞書「除夜」は存し、歌本文のみが脱する。

(2) 詞書の異同

67〜申てあひ侍ねは〜申してあひはべらざりければ

78〜つれなき女に〜つれなく侍りける女に

81〜閨冷夢驚といふことを〜閨冷夢驚といふことを、人にかはりて

84〜心の外なりしさまなと〜心のほかなりしさまとことなくいひつかはしたりける返ごとに

85 〱 申送りし 〱 〱 申しておくりて侍りける

87 〱 人のもとより申送りし 〱 〱 人のもとより申し送りて侍りける

91 〱 彼人みまかりてのち後家のもとへ 〱 〱 かの人身まかりてのちかの家のもとへ

95 信解品 〱 法華經品品の歌よみしなかに信解品

これらの諸点を『王朝文学』（前出）所掲の、諸本異同対照表によって検すると、67、81、85、87などは静嘉堂本に、88は木村氏本に近似する。また84、95などは本書独自の形態を示すが、いずれも単なる誤脱とも考え得る。ただし総じて、右の異同中には「侍る」の用法の不統一性が指摘でき、さらに84、95を単なる誤脱でなく未整理状態の詞書と見れば、本書の詞書の形態は草稿的性格と言えようか。そしてそれは、(1)の四首の欠脱歌の状況と関るかもしれない。

(3) 歌句の異同

11 なぎやおしかる 〱 なぎやうらむる

16 春しなけれは 〱 ならひなけれは

35 昔しらねは 〱 むかししらねど

45 うつしとめつ 〱 うつしとどめつ

49 青き葉を 〱 青葉をば

56 渚の浦の 〱 いそまのうらの

71 この世中の 〱 こは世のつねの

80 かはらさるらん 〱 かはらざらなん

96 隔し物を一へだてしもせず

これらのうち 35、80 などは誤写の可能性も存するが、恋雑の中では、71 が静嘉堂本と、96 が書陵部本忠度集と近似している。また四季歌では、16、45 が有吉氏架蔵 A 本と近似し、11、49、56 などは既掲の諸翻刻本文に認められないものである。

このように本書は、欠脱歌の多い点、静嘉堂本や木村氏本と共通する側面がある点、等を指摘でき、かりに草稿段階に近いものと考え得るならば、「忠度集」の成立過程を考える上できわめて興味深い一本と云うことができよう。

翻 刻

翻刻に際しては、左の如き諸点に留意した。

- 一 漢字、仮名の区別は原本どおりとした。
- 一 異体字は、「哥」以外すべて通行の字体に統一した。
- 一 オドリ記号は、漢字一字は「々」、仮名一字は「々」、二字以上は「く」に統一した。
- 一 丁変りに「」を付した。
- 一 判読不能箇所や途中の欠字は□、又は□で示したが、推定し得るものについては「」を付して示した。
- 一 適宜（ママ）を付し、原文の形を示した。
- 一 番号は和歌の頭に『新編国歌大観』番号を、末尾に本書の通し番号を付した。

〔付記〕 翻刻にあたり、翻刻許可を賜った三田情報センター、及び翻刻本文の点検に協力下さった佐々木孝浩氏に御礼申し上げる。

8 香（たぐ）にとめて人はこす□も梅花よきてをわたれ春の山風（一）

夜思梅花と云心を人々よみ侍しに

9 梅花よるは夢にも見てしかなやみのうつゝはにほひはかりそ（二）

古郷梅花をよめる

10 ふる郷はそことも見えず梅かゝの匂や宿の軒端成らん（三）

柳

11 青柳の糸染かけてさほ姫は見にくる人のなきやおしかる（四）

桜

12 惜かねちる花毎にたくふれは心も風にさそはれにけり（五）

13 みよし野々花咲にけり常よりも朝ある雲のはるゝよもなき（六）

賀茂哥合に花をよめる

14 木の本をやかて栖になさしとて思かほにや花はちるらん（七）

為業か哥合に古郷の花を

15 ざゝ波や志賀の都は荒にしを昔なからの山桜かな（八）

東山に花見侍るに家つとはおらすやと人々申侍しに」⁽²⁾

16 家つともまた折しらす山桜ちら□かへりし春しなれば(九)

喚子鳥

17 聞侘て我かと斗こたふれはさもあらすとや猶よふこ (一〇)

苗代

18 苗代にせぎやとむらんかきねもるいさら小川の音よはる也(一一)

人々三月盡哥読侍しに

19 我身にはよそなる春とおもへとも暮行けふは惜やはあらぬ(一二)

あくるまてなかめ明して」

20 行春もさすか名残やとめつらん哀かはらぬ明ほのゝ雲(一三)

夏卯花

21 心あらん人もかくこそうへて見め賤か垣ねにさける卯花(一四)

卯花藏水

22 もり出る音にてそきく卯花のしつにしからむ玉川の水(一五)

郭公

23 待えたる心ちこそせね郭公とを里をのゝ夜半の一声(一六)

海辺郭公」

24 卯花と波やみゆらん時鳥まかきのしまにきつゝ鳴なり（一七）

菖蒲

25 あやめ草尋る人のこゝろにそまつなかきねはかゝり初けん（一八）

夏

26 小萩原また花さかぬ宮城野に何を妻とて鹿のこすらん（一九）

隣家廬橋

27 匂なる花橘はいにしへの宿のとなりにさそひきつらん（二〇）

蛩

28 身の外に思ひあまれるけしきとていつちともなく行蛩哉（二一）

滝下蛩火

29 秋ちかく成やしぬらん清滝の川せ涼しく蛩とひかふ（二二）

夕氷室

30 氷室山あたりの外やいかならん夕かけ涼しみな月の空（二三）

秋

立秋

31 秋来ぬとしらてきくにも大かたはあ□しかるへき風の音哉（二四）

月前草花

32 萩か花たをれはぬるゝ袖□□へ露をしたひてやとる月影 (二五)

薄

33 花すゝきなひくけしきにしるき哉風吹かはる秋の夕暮 (二六)

古郷萩

35 萩原に見るそかなしき高円の尾上の宮の昔しらねは (二七)

河原院にて古郷鶉と云事を人々読侍しに

36 塩かまの昔のあとは荒はてて浅か原（ついで）にうつら鳴なり」 (二八)

鹿

37 さ夜更て鹿の音。とをく成行は嶺のあらしや吹よはるらん (二九)

38 さらぬたに秋のね覚はかなしきをいかにせよとて鹿の鳴らん (三〇)

霧

39 旅人にあらぬ我さへ夕霧に渡瀬忘るゝみなれ川かな (三一)

駒迎

40 さ夜更てせたの長橋引わたす音もさやけし望月の駒 (三二)

月

41 □ひのまも空やはかはるいかなれは更行まゝに月の澄らん (三三)

42 月影はいつことわかし物ゆへに君に心のとまらさるらん (三四)

野径月

44 月影のいるを限に分行はいつこかとまり野原しの原（三五）

関路月

45 月かけもうつしとめつゝ相坂の関は清水の名にこそ有けれ（三六）

九月十三夜

46 惜といへと秋の半の月は猶今夜もありと思なされき」（三七）

遍照寺にて人々月を見侍しに

47 あれにける宿とて月はかはらねと昔の影は猶そ床しき（三八）

旅宿擣衣

48 旅ねする竹田の里にうつ衣一夜の程に聞そなれぬる（三九）

法金剛院にて池辺紅葉と云事を人々よみ侍しに

49 青き葉を池の水草にまかへつゝ色付枝そ陰はみえける（四〇）

山家秋の暮といふことを」

50 山□にすみぬへくやとならはせる心も絶ぬ秋のゆふ暮（四一）

冬

初冬

51 荻の葉に哀しらせし風の音の今朝いつしかとはけしかるらん（四二）

落葉

52 嶺つゝき吹こすかせにさそはれて紅葉散かふ常磐木の杜 (四三)

雪

54 風こしの嶺にたまらぬしら雪は晴行雲(やう)に猶そ消ける (四四)

海辺雪

55 打そよく水の村あし下おれてうらさひしくそ雪消にける (四五)

千鳥

56 うきねする渚の浦のさ夜千鳥友よひかはす声きこゆ也 (四六)

月前千鳥

57 さ夜深て月影さむみ玉の浦のはなれ小嶋に千鳥鳴也 (四七)

暁更千鳥

58 (ハね) 覚する我友としもおもはてや野嶋か崎に千鳥鳴らん (四八)

炭竈

59 山ふかみ雪気の雲と見ゆ□□ていく炭かまの煙立らん (四九)

除夜

60

恋

(五〇)

はしめていひ出る恋と云事を人にかはりて

61 我身より恋はよそなる物なれや忍心になはさるらん (五一)

互忍恋」

62 恋しなん後の世迄の思出はしのふ心のかよふはかりそ (五二)

失本心恋

63 かゝらしと思ひし物を忍かね恋に心をまかせはてつる (五三)

恋遠郷人

64 恋わたるいもか栖は思ねの夢路にさへそはるけかりける (五四)

隔河恋

65 稀にたにあふ夜もあらは天川へたつる星や類ならまし (五五)

月前恋」

66 月影そふき恋路のしるへな□なかむるまゝに思ひ入ぬる (五六)

神かけて誓侍ける女のさうしなるよし申てあひ侍ねは

67 おもひぎやかけてちかひしその神のいもゐによせて絶ん物とは (五七)

しのひて人に物申けるにかねもうちつ也といさめけれ

は

68 鳥の音をしはし待見よさゆる夜の霜にもあへす鐘も鳴らん (五八)

恋の心を」

69 いかにせんしはしはさこそいとほめと思し程にやかてつれなき (五九)

70 浮世をは歎なからもすこしきて恋に我身やたへす成らん (六〇)

71 いかにせんこの世中のならひそと恋しもなそや思なされぬ (六一)

72 なをさりの情はかりにたのむれはいとはすともつらからぬかは (六二)

73 思出る人なき夜半の袖たにもたゝなる物か秋のね覚は (六三)

経盛卿福原の山庄にて寄松恋と云事を

74 たのめつゝ日数つもりうらみても松より外のなくさめそなき (六四)

寄名所恋」

75 □を捨てあはれとも見よさる沢の□ける世にこそ情なからめ (六五)

寄源氏恋

76 あふとみる夢覚ぬれはつらき哉旅ねの床にかよふ松風 (六六)

夢中逢恋

77 夢さめてなこりにたへす成行はあふとみつるにかへん命か (六七)

年をへてつれなき女に

78 うらみかねそむきはてなんとと思より浮世につらき人そうれしき (六八)

絶後悔恋」

79 忘にし心のみそ恨へき人はたえねといとひやはせし(六九)

なにとなくいひかはしける女にしたしきさまになるへき

よしをいはせ侍て後おこたりさまに見えければ

80 いとはるゝかたこそあらめ更に又よその情はかはらざるらん(七〇)

雑

閨冷夢驚といふことを

81 風の音秋の夜ふかくね覚して見□てぬ夢の名残をそ思」(七一)

ある所の屏風の絵にあ□たる家に老人花見たる所

を人々よみ侍しに

82 なつ恋こひし昔にあらす古ぬるをしらぬ翁と花やみるらん(七十二)

大輔に初てあひて哥よみ連哥なとして明る

あしたにつかはしける

83 難波津の古き流をせきとむる心の水をふかく見し哉(七三)

友たちの今くると申てをともし侍らて明るあしたに月見る

人にいさなはれて心の外」なりしさまなと

84 月をみてまたれぬ夜半のあらはこそたのめてこぬも分て思めや本のまゝ(七四)

法輪に籠て侍る人の申送りし

85 思たつ心よはくもぬるゝ哉草の庵にすみ染の袖（七五）

かへし人にかはりて

86 草の庵は思やるたに露けきにさそ墨染の袖はぬるらめ（七六）

歎事侍けるおなしさまなる人のもとより申送りし」

87 侘人の涙にぬるゝ袖に又秋は露□へをくそかなしき（七七）

返し

88 さもこそはおなし歎といひなから露もかはらぬ袖の上哉（七八）

世のはかなき事小侍従に申て侍るほとに山さとにこもり

ぬと聞て申送侍りし

89 あやなしや世をそむきなはしのへとは我こそ君に契をきしか（七九）

長根哥（つと）の心を

90 冬きては何を形見と思はまし浅茅かはらも霜枯にけり」（八〇）

盛方朝臣書をきける万葉抄を彼人身まかりてのち後家の

もとへかへし遣とて

91 ありし世は思はさりけん書をきてこれを形見に人しのへとは（八一）

返し

92 見てそ猶袖はぬれけるなき人の形見と思水くきの跡（八二）

しのひて物申ける女の心にもあらず絶侍ける後

「程なく身まかり侍にければたれともなく

て母の許にさ□をかせ侍ける」

93 もろ共に心のまゝに歎らん人さへはて□うらやまれつゝ（八三）

親のいさめければ申絶ける女の身まかりぬときよてよみ

侍ける

94 わかるともあはしなからの中ならば二度ものは思はさらまし（八四）

信解品

95 たらちねときかぬさきより大方はあやしき迄そなくさひにける（八五）

安楽行品

97 その玉をむすひこめ釵もとゆひもとくへき程の有ける物を」（八六）

提婆品

96 よそにこそあたと見ゆとも千とせ迄つかへし中は隔し物を（八七）

観音品

98 おり立て憑となれば飛鳥河淵もせになる物とこそきけ（八八）

八幡臨時祭

99 神さひて猶やさしきは諸人の朝くらかへす春の曙（八九）

賀茂哥合述懐を

100 ひとすらに祈るにはあらず思かねそむきはつへき世共しらせよ」(九〇)

述懐

101 なからへはさりとともと思心こそ時につけつゝよはりはてぬれ(九一)

祝

102 千とせとは先いはれける君かため思心はかきりなければ(九二)

三位中将具衡卿の許より内大臣所へ梅に付てまいら

せんとてこはれて侍しに

103 千代ふへき君かゝさしにこの春そ手折初ぬる宿の梅かえ(九三)